

会の中であって如何に生き抜くか、またその服飾等が領主藩主のいうままであったか、町人生活の向上がひいては農民生活の上にもこれを見ることができないかに問題をふまえて行なっている。今回はその履物編である。

2. 和洋女子大学服装史研究室施行の昭和25年以來の労働着調査、地方町村史、民俗資料を主な資料として用いた。

3. 日本が島国であり海岸線の曲折と丘陵の多いことは仕事着ばかりでなく、履物の上にも大きな変化をきたした。履物の主な材料は米穀文化のもたらした藁で寒暖の著しい差のある南北両端においてもその利用は変わらないところに特色がみられ、しかも丘陵の多いところには体力の中心が土ふまずと指尖の中央部におかれるところから足半分のいわゆる足中の需要が多くなり、鎌倉時代以來代表的な履物として武家にも民間にも利用された。ことに近世に入ってからは農村で、履物といえば名称は変わっても形態は全く足中で後には長草履をも含めて足中と称えるようになった。農村法度としての紙緒、裂緒、革緒は年代が下がるにつれて内的な利用は多くなり、自作の下駄も出銭の下駄、ボックリをはくようになって明治の新世界をむかえることになるのである。

B-1 近世以降における農民服飾の研究 履物

和洋女子大 遠藤 武
○鷹司 綸子

1. 「農は国の本なり」といわれながら封建社会の農民生活はすべて自給自足を強いられ、少しの金銭の出費をも堅く禁じられていた。本研究はそのような政治・社